

## 松本先生にいただいた濃密な時間

柴 眞理子

コロナ禍でお目にかかれないうちに先生は旅立たれ、虚しさが募る私は、先日、京都にある松本家の墓前を訪れた。長きにわたりご指導いただいたシーンが次から次へと浮かび、日本の大学に初めて舞踊の研究ポストをおかれた先生の真摯なご努力と偉大さを嘯みしめた。

奈良女子大付属小学校で自主創造性の舞踊学習に目覚めた先生は、時を経て東京教育大に異動され、「舞踊学が専門」と言えるようにと、創作ダンスの授業研究と共に、舞踊文化への思索も深められ、「舞踊学」と冠された講座や学科を新設なさったパイオニアである。

私は幸いにも先生のお傍で、舞踊学を拓かれる先生のなさり様に多くを学ばせていただいた。ご一緒させていただいた濃密な時間の幾つかを回顧し、先生への追悼文としたい。

留学か博士課程進学か迷っていた私に、先生の文部省在外研修への同行（1976年：アメリカでの約1か月間）を勧めて下さった。ツーソンでのM. H'Doublarとの再会では、先生が翻訳されたH'Doublarの“Dance: A Creative Art Experience”の日本での活用、舞踊教育の現状等が話題となり、翌日には小学校・大学のダンスの授業、ダンスカンパニーのレッスン、ディナー等をセットしていただき、H'Doublarのお心の行き届いたおもてなしに、お二人が共有される専門領域への視座と人となりを感じての研修のスタートとなった。

ミルウォーキーで開催されたAAHPERの会議、A National Dance Association Presentation（5日間）で連日沢山のプログラムに参加。最終日にはレクチャー“Wisconsin Idea”があり、H'Doublarの足跡を再認する機会となった。個別の舞踊実践と理論に刺激を受けながらも、先生はそこに止まらず、舞踊学の構造と要素を考える手がかりを求めての学会への参加であったことも知った。

会議後、ニューヨークへ移動。州立、市立、私立の3つのニューヨーク大学やジュリアード音楽院、パフォーマンスアーツスクール、小学校、ダンスカンパニー訪問と続いた。先生が心待ちにしていた私立ニューヨーク大学のP. Law（後にCORDの会長就任）に、日本の大学に舞踊学部・舞踊学科をつくりたいとお話しされると、Lawはアメリカの現状のご説明をされ、松本先生に教授会に陪席なさることを勧めて下さった。これ

は、初対面の松本先生の迫力あるお話しに、Lawが、こたえて下さったのであろう。

毎日、朝から晩までご一緒し、私はたくさん考えるヒントもいただき、留学でなく、松本先生の下で研究を続けたいと思うようになり、先生にもご賛成いただいた。幸い、この年にお茶大大学院人間文化研究科（博士課程）が新設となり、設置審に教授と認められた先生が比較芸術論講座に所属となられ、博士課程での「舞踊学」研究の扉が開かれた。先生は、新しい講座や専攻で舞踊が「学」として認知されるためには、まずご自分自身が「学」に関する業績をあげなければとお考えになり、研究を重ねられると同時に、授業研究にも力を傾注され、論と実践は車の両輪であることをずっと大事にいらした。先生のご努力が博士課程比較芸術論講座に結実したと受け止めた。

もう一つの先生との濃密な時間は、神戸大学に勤務する私に神戸市教育委員会からいただいた電話に始まる。「神戸市主催で学生・生徒を対象にした全国規模のダンスコンクールを開催したい。ついては松本先生のお力が必要、先生はご賛成下さるだろうか」という内容であった。先生が長年神戸市でダンス講習会講師をされていらしたご縁からのお話であった。先生がこの話の実現に向けて提案された要点は、①創作ダンスのコンクール部門と参加発表部門を設ける②審査基準と審査方法はダンス創作の要素を考慮し考案する③NHKによる全国放映を実現する。「全国放映されれば、創作ダンスをみたことのない人々が見ることができ、ダンス授業に資する」とお考えになられたことであった。文部省（当時）の教え子にNHKのスポーツ報道担当の方をご紹介頂き、渋谷の放送センターで趣旨をお話しされ（私も同行）、後日、放映のお返事を頂けた時、安堵感と感慨に満ちた先生のお顔があった。放映、これも自主創造性の舞踊学習普及という先生の根底にある思いであると理解した。

先生のご功績は多岐にわたることは言うまでもない。ここでの記述は、先生の根底に流れる舞踊実践・舞踊学への愛、大学人としての責務に立ち向かわれた先生のお姿の一端に過ぎないが、先生を思い起こす契機となることを願いつつ…。